人 ひと

今月は、結成18年目を迎えた、内牧の「新町凧の会」の皆さんをご紹介します。

大阿蘇全国凧揚げ大会で一躍阿蘇は凧揚げのメッカに

昭和52年、RKK、阿蘇町、商工会が企画運営し、日本凧の会の協力で、第1回大阿蘇全国凧あげ大会が盛大に大観峰で開催されました。夏の凧あげ大会の開催は全国で初めてとあって当時大変注目を浴びました。さらに第3回目からは場所を旧山上人工スキー場一帯に移し行われ、国内はもとより海外からの参加も増加。これにより世界大会を催すなど、凧揚げ大会は阿蘇の名物になりました(大会は第25回で終了)。あわせて地元でも大会を盛り上げようと、商工会青年部など各種団体や地域の人たちが創作凧をこしらえて参加されるようになりました。

新町凧の会もその機運で、平成3年、新町の青年頭が中心となり、馬場今朝光会長ほか16人で結成。大会出場のため、凧制作に会員それぞれの技術を活かし、20畳の大きさの大凧や750個もの連凧、健磐龍命伝説にちなんだ巨大ナマズ凧など、いくつもの大作を制作。コンテストでも好成績に輝き、新町凧の会は、毎回大会を賑わせ周囲をリードする存在へと序々に成長しました。

凧を通じた国際交流

大阿蘇凧揚げ大会では、全国の凧の会が集うとあって、阿蘇に来てもらえばお返しに、新町凧の会は、四国の丸亀ほか遠くは、秋田、北海道などの凧揚げ大会に出場。また、韓国やブラジルでの大会にも参加するなど、阿蘇での大会の活性化のため、精力的に活動されました。

現在は、野口千男喜会長ほか7人で会を運営。かつての交流で得た知識やコンテストで磨いた技術を活かし、今その経験は、子どもたちへの伝承活動へと注がれています。

自分で作った凧が揚がる喜びを今の子どもたちにも知ってほしい

会の皆さんの現在の主な活動は、凧づくりの指導。放課後学習やゆとり教育に講師として呼ばれ、小学生に凧作り・凧揚げを教えています。また、都会の修学旅行生の体験学習も受け入れています。以前、関西の修学旅行生50人に大凧を作らせ、大観峰で50人に糸を引っ張らせたところ、3度目の挑戦でやっと大凧が舞い揚がり、その時生徒全員で涙をポロポロ流し喜んだ。その時の光景が今も会員の皆さんの胸にあり、「体力の続く限り子どもたちに、自分たちで懸命に作った凧が大空に舞い揚がる、あの喜び楽しさを教えよう」と決意。子どもたちの笑顔のために活動を続けておられます。

この子たちが大人になっても

「最近の子どもたちは、手先の作業がおぼつかない、小刀はもちろんいろんな工程がスムーズにいかない」と、昔ながらの遊びを覚えることは、生きる力につながると皆さん。「ただ一回教えると、どんどん上手くなるので、ぜひ、覚えた凧作りを大人になって自分の子どもにも教えてほしい」と願っています。

なるほど、童心をそのままに凧に情熱を注がれている皆さんのお顔は天真爛漫。新町凧の会では、毎年、元旦の朝に、凧を揚げ、一年の健勝を願います。今年の正月に舞う凧は干支にあやかり写真の「赤牛凧」。12年前ものを、リメイクしました。12年前より、顔の表情に気合いを入れたそうで、「これで長引く不況をぶっ飛ばします！」と、大きな凧を全員で掲げ、元旦恒例、新町の凧揚げで新しい年が明けました。

▲学校で子どもたちに揚げ方を指導